

現代思想のパフォーマンス

— ジャン・ボードリヤール —

案内編&解説編 (3)

難波江 和 英

Performance of Contemporary Thought:

Jean Baudrillard

Introduction & Interpretation (3)

NABAE Kazuhide

要 旨

本稿は、ジャン・ボードリヤールの思想を時系列的に読み解くシリーズの第三回。今回の範囲は1980年代から2000年代にかけて、対象となるテキストは『宿命の戦略』（1983年）、『透きとおった悪』（1990年）、『不可能な交換』（1999年）、『悪の知性』（2004年）である。

『宿命の戦略』は、1980年代の西欧世界を展望して、商品が記号として溢れた果ての消費文化の行く末を予見する。それは、シミュレーション革命が進行して、物がハイパーリアルな記号になり、世界が記号の意味作用で透明になる段階である。その結果、世界は成長から過成長へ、危機からカストロフへ傾斜していく。

この論点は『透きとおった悪』でも反復され、1990年代の時代の実相として理論化される。つまり、西欧の消費文化は、商品の記号化の段階から、記号の膨張を特徴とする「フラクタル」の段階へ達する。そこでは、ハイパーリアルな自己増殖が進んで、「他者」と「悪」という新しい問題が立ちあらわれる。

『不可能な交換』は、「自己と他者」、「善と悪」という二項対立の弁証法によって進歩を説明できなくなった1990年代末の西欧世界を活写する。自己を善として純化するハイパーリアルな世界では、否定された非自己がウイルス化した他者＝悪になり、自己へ報復するという現象が起きる。その結果、自己と他者、善と悪の交換は不可能になり、世界は交換から生まれるあらゆる価値を喪失する。

『悪の知性』は、世界が「デジタル性の全宇宙」と化した段階を「インテグラル」と規定し、デジタルワールドの自己肯定性にヴァーチャルの幸福を見る人間が、自己破壊の欲望を募らせる存在になるという逆説を論証する。「インテグラル」の世界を究極の善とすれば、それに排除された「ありのままの世界」の思考こそ、善へのキックバックとしての「悪の知性」である。そこから、次号へと続くテロの問題が浮かび上がる。

キーワード：エクスタシー、過成長、ハイパーリアル、悪、インテグラル

Abstract

This is the third article in a series that attempts to draw a critical portrait of the French sociologist and philosopher, Jean Baudrillard. The focus is centered on the theoretical shift he made from the 1980s to the 2000s in the four texts, *Fatal Strategies* (1983), *The Transparency of Evil* (1990), *The Impossible Exchange* (1999), and *The Intelligence of Evil* (2004).

Fatal Strategies presents a new insight into the Western consumption culture in the 1980s in which products have been fully commodified as signs. At this stage, the innovation of simulation has made the world “transparent” with the hyperreal effects of signs. Hence, the crucial issue to socio-cultural development is no longer growth of products but overgrowth of signs.

The Transparency of Evil elaborates on this change in the context of the 1990s, specifying it as a “fractal” stage in which the commodification of products into signs has been surpassed by the autonomous proliferation of signs. This stage is featured by the self-expansion and self-affirmation of signs and thus arouses a new controversy over the lack of “the other” and the emergence of “evil.”

The Impossible Exchange highlights the Western consumption society in the late 1990s in which the dialectics of self and the other as well as that of goodness and evil fails to find a way out. In the hyperreal world, the exchange between binominal oppositions becomes impossible, and the world is deprived of any value worthy of the name that has been brought forth by the act of exchange.

The Intelligence of Evil defines the virtual nature of the digitalized world in the twenty-first century as “integral,” and illustrates how people today inadvertently intensify their desire for self-destruction as they pursue “integral” happiness to secure their sense of goodness. It is into this paradox that “the intelligence of evil” is permeating.

Key words: ecstasy, overgrowth, hyperreal, evil, integral

これまでの二回の連載では、ボードリヤールの『物の体系』（1968年）、『消費社会の神話と構造』（1970年）、『誘惑について』（1979年）、『シミュラクルとシミュレーション』（1981年）をテキストにして、模造の段階から大量生産の段階を経てシミュレーションの段階へ至る消費社会の変容を見てきた。今回の目標は、その延長線上に、1980年代から2000年代にかけてのボードリヤール像を描くことである。

そのテキストとして、『宿命の戦略』（1983年）、『透きとおった悪』（1990年）、『不可能な交換』（1999年）、そして『悪の知性』（2004年）を取り扱う。これらの主要著作において、ボードリヤールがどのように西欧の高度消費社会の進化をとらえているのか、それを素描することから始めよう。そこから、4冊のテキストの刊行時期（1983年～2004年）に重なる20年あまりの時代状況を超えて、21世紀のグローバル世界への視界も開かれてくるだろう。

『宿命の戦略』

『宿命の戦略』は、その冒頭から、特有のレトリックで、物が物としての意味を失う世界を突きつけてくる。

「物は、煩わしかった意味の弁証法から逃れる方法を見つけた。それは、極限まで上昇して、猥褻を内なる目的や分別のない理性の代りにしながら、無限に増殖し、ポテンシャルを高め、本質をせり上げることによってである。¹⁾」(7)

1968年の『物の体系』では、消費の対象は、生産物から記号としての商品へ移っているとはいえ、物はまだ物としての意味を保っていたところがある。「消費される物になるためには、物は記号にならなければならない」(277)。しかし1970年の『消費社会の神話と構造』になると、消費の秩序は、人が記号を操作することによって、というより、人が記号に操作されることによって保たれている。「消費のプロセスは、もはや労働や止揚のそれではなく、記号を吸収し、記号に吸収されるプロセスである」(308)。物の生産から記号の消費へ。ここには、1960年代から1970年代にかけて起こった文明社会の大きな変化が示されている。

それから10数年を経て、1983年に出版された『宿命の戦略』は、その先に広がる1980年代の世界の風景を見通している。それは、ネット通信や投機バブルのように、商品が記号として溢れた果ての文明社会の行く末である。その特徴は、シミュレーション革命の進行によって、物が意味の呪縛から逃れ、エクスタシーを引き起こす記号、つまりハイパーリアルな記号になった点にある。「エクスタシーとは、意識(sens)を失うまで回転し、純粹で空虚になったかたちのなかで光り輝く、すべての身体に備わっている特性である」(9-10)。フランス語の“sens”には、「意識」の他に「意味」や「方向」というニュアンスもあることに注意しよう。意識と意味と方向の喪失、それこそエクスタシーである。

1980年代の世界では、その意味で、テレビが伝えるものは、実在のコピーではなく「実在の

エクスタシー」であり、流行が訴えるものは、時代のトレンドではなく「美のエクスタシー」である (10)。それと同様に、ポルノも性自体ではなく「性のエクスタシー」になり、テロも暴力ではなく「暴力のエクスタシー」になる (46)。「もはや弁証法ではなく、エクスタシーが進行している」(ibid.)。ボードリヤールによれば、物はそのとき物の次元を超えて「猥褻」(obscène) になるという。それは、物が物として理解されてきた場 (scène) を離脱 (ob) して、これまでの意味の文脈から外れることと考えられる。つまり「猥褻」とは、物がハイパーリアルな記号になり、実体としての意味を脱ぎ捨て、透けて見えるほどの裸体になることである。ボードリヤールは『パスワード』(2000年)でも、「リアルすぎる世界こそ猥褻である」(39)、「猥褻、つまり物の全面的な可視性」(40)と説明している。

世界が現実よりリアルに見える記号に置き換えられるとき、その逆説として、意味は無意味によってではなく、記号独自の新しい意味作用によって消える。たとえば、「ルイ・ヴィトン」という記号の音響イメージのなかで、物としてのバッグが見えなくなるように。世界から意味を溢れさせて、もはや「意味」という言葉さえ不要になるほど「過剰と飽和」(『宿命の戦略』、11)を実現させること。その最善策は、シミュレーション操作を介して、ハイパーリアルな記号を増殖させ、世界をエクスタシーで透明にすることである。これこそ、『宿命の戦略』の基本メッセージにほかならない。

その好例は、情報システムだろう。それは現代の意味生成システムとして、「生きた意味作用のなかに死んだ意味を予見し、それゆえ、役に立たない人工補綴のように、過剰な意味を生産し、余分な意味を生産するという点で転移性をもつ」(36)。ボードリヤールは、意味の過剰供給によって「ポテンシャルを高め、本質をせり上げる」ことに成功した消費社会の膨張現象を「肥満」(31)に喩える。

「問題になるのは個々人の肥満ではなく、システム全体の肥満であり、あらゆる文化の猥褻さである。」(32)

「肥満体の意味は、もはやはっきりした対立関係のなかになく、むしろ過剰のなかに、無駄のなかに、ハイパーリアリティのなかにある。」(38)

「肥満にはもはや方向性〔意味、意識〕もない。」(ibid.)

「肥満とは動きのエクスタシーである。」(ibid.)

異常増殖、透明性、無方向性……これらの特徴から、もう一つ、ハイパーリアルな過剰に関するイメージが浮かんでくる。そう、癌である。実際、ボードリヤールは『宿命の戦略』でも、スーザン・ソントグの『隠喩としての病』(1978年)を踏まえて、ハイパーリアルな波及効果を説明している。「触手を伸ばし、突出し、コブをつくり、異常成長する。それが飽和世界の慣性的宿命である。自らの究極をハイパー究極で否定する。癌のプロセスもまたそうではないだろうか」(13)。ボードリヤールは、ここから、1980年代以降の西欧世界における癌化した進化をとらえる新しいキーワードを捻出する。それが政治を超えた政治、ハイパー政治ともいうべき「トランスポリティック」(29)である。

トランスポリティックとは、「成長から過成長へ、合目的性から異常成長へ、有機的均衡から癌性転移へ至るプロセス」であり、「カタストロフ〔波乱〕(catastrophe) の場であって危機(crise) の場ではない」(ibid.)。政治の時代は、革命に象徴されるように、暴力で旧制度を覆し、新制度を築くという世界変革の夢による「成長」をめざしていた。他方、トランスポリティックの時代は、テロに象徴されるように、アメーバ状に伸び広がり、分裂を繰り返しながら、偶発、分散、増殖によってイメージされる「過成長」を遂げていく。

政治の時代が「成長」の時代であり、トランスポリティックの時代が「過成長」の時代であるとすれば、前者は「無秩序(anomie)」の時代でもあり、後者は「変異(anomalie)」の時代でもある(30)。「暴力は無秩序であり、テロは変異である」(39)。ボードリヤールは、このように「無秩序」と「変異」を区分した上で、それぞれに説明を加える。「無秩序とは法(loi)の裁きから逃げることであり、変異とは規範(norme)の裁きから逃れることである」(30)。さらに、「法は審級であり、規範は曲線である。法は超越性であり、規範は平均値である」(ibid.)。それでは、政治の時代が「法と無秩序と危機」の時代であり、トランスポリティックの時代が「規範と変異とカタストロフ」の時代であるとは、どういうことだろう。

政治の時代	トランスポリティックの時代
成長	過成長
法	規範
無秩序(暴力)	変異(テロ)
危機	カタストロフ

政治の時代の「無秩序」は、「秩序」の対義語である。つまり、秩序が自明のものとして仮定されていなければ、無秩序は起こりえない。法は判定の基準(「審級」)として、秩序を世界の真理に見立てることで、世界の絶対者(「超越性」)の位置を占めている。法によって保証された秩序を崩して、無=秩序をもたらすのが「暴力」であり、秩序と無秩序の分裂こそ「危機」である。

他方、トランスポリティックの時代の「変異」(anomalie)は、「正常」(normalité)の対義語ではなく、社会生活の基準となる「規範」(「平均値」)に含まれた偏差としての過激な出来事である。それゆえ、変異はどんな二項対立とも関係なく、対立項の否定から生まれる「危機」とも結びつかない。「変異には、正常に背く異常としての悲劇的な面もなければ、無秩序に見られる危険で逸脱した面もない」(30)。しかし変異は、テロのように、日常の延長(「曲線」)として勃発した出来事でありながら、日常の因果性や意味性の地平を突き抜けた事件性を帯びている。それこそ、波乱としての「カタストロフ」といえる。「カタストロフとは、最高に生の出来事である」(17)。

『宿命の戦略』が提示したのは、商品が記号の差異から価値を量産する消費社会の「成長」ではもはやなく、ハイパーリアル化した記号が過剰になり、記号の差異を無効にしながら、成長を超える成長へ暴走していく高度消費社会の「カタストロフ」である。それは、物の生産(前

近代)から商品の大量生産(近代)へ、さらには商品の記号化(ポストモダン)から記号の膨張へ、世界が第四段階の次元に入ったことを示している。この生産=消費における新次元のモチーフは、『宿命の戦略』から七年を経て、1990年に出版された『透きとおった悪』でも反復され、時代の実相として理論化されていく。

『透きとおった悪』

『透きとおった悪』の第一印象は、『宿命の戦略』で見た風景に時代が追いついたということである。それはすでに、最初の章のタイトルから明らかだろう―「狂宴のあと」(11)。「物の現状を特徴づけるとすれば、狂宴のあとの状態ということになる。狂宴、それは近代性の爆発した瞬間、あらゆる領域で解放がなされた瞬間である。」(ibid.)。

1960年代から1990年代にかけて、世界規模で、人種の解放、女性の解放、性の解放、文化の解放、市場の解放、体制の解放のように、「解放」という近代の物語がひと巡りして、「近代性の爆発」と共に「狂宴」は終わった。そうした流れを背景にして、この「狂宴」を「生産力の解放」(ibid.)による成長のピークと読み替えれば、「そのあと」とは「成長の果て」、つまり、記号のハイパーリアル化が加速して「過成長」(38)の時期を迎えた世界を示している。「我々はいまや成長社会ではなく、過成長社会にいる」(ibid.)。

ボードリヤールは、この「過成長社会」を表現するにあたり、『宿命の戦略』と同様、肥満のメタファーを多用する。たとえば、「飽和」(12, 39)、「超過」、「肥満度」、「驚くべき無用性」(39)、「増殖し、肥大し、それでも分娩できないでいる世界」(ibid.)。その特徴は、「社会自体の目的に照らしても測定できないほど、成長を抑制なく続ける」、「原因は消滅しているのに結果だけが増殖する」という点にある(38)。それはまた、金融、流通、情報、サービス、コミュニケーションに代表される社会システムが、ハイパーリアル化した商品(株、広告、ニュース、ファッションなど)を提供し続けて、そのため調整不能に陥ることを予兆している。

ボードリヤールは、ここでも、それを「癌細胞の転移の過程」(ibid.)に喩えて、因果性と関係なく過剰供給に走り、自己を制御できなくなった1990年代の社会システムを描く。これはもはや「危機」の延長ではなく、『宿命の戦略』で見た「カタストロフ」の実現といえる。危機は「常に因果性の問題、つまり原因と結果のアンバランスの問題」(ibid.)である。しかし、カタストロフは「最高に生の出来事」として発生し、予想も抑制も管理もできない。それゆえ、「問題は危機ではなく、致命的な出来事、ゆっくりしたカタストロフである」(41)。

現代の文明社会は、すでに見たとおり、物の生産(前近代)から商品の大量生産(近代)へ、さらには商品の記号化(ポストモダン)から記号の膨張へ、四段階の進化を遂げてきた。その進化の準拠枠になっていたのは、第一段階では物の使用価値、第二段階では商品の交換価値、第三段階では記号のモデルだった。しかし、「カタストロフの段階」(13)と形容される進化の第四段階では、価値の準拠枠が見つからない。というより、そこでは「価値判断の不在によって、価値が炎上してしまう」(27)。ボードリヤールは、それを「価値のフラクタルな段階」(13)と命名する。

その段階では、たとえば、アート市場はもはや美術品を取り引きする場ではなく、「金融市

場におけるコントロール不能な流動資本のイメージ」や「純粋な投機と完全な流動性」(27)になる。つまりアート市場は、資本の過剰を処理する投機の流れとして、「価値のエクスタシー」(ibid.)を生むマネーゲームの空間へ変化する。実際、日本でも1980年代後半から1990年代にかけて、美術品の投機バブルによって「熱狂と狂乱と過剰」(26)が渦巻く「価値のハイパー空間」(27)が広がり、美学を超えた美学、ハイパー美学ともいうべき「トランスエステティック」(18)の時代を迎えた。「現代アートが美醜の彼岸にあるように、その市場は善悪の彼岸にある」(27)。

美と醜の二項対立を超えた世界では、現実のリアリティは、絵画や写真のシミュレーション・アート、あるいはホログラムや3Dのように、あまりにも見えすぎる現実、つまりハイパーリアルな過剰による「猥褻」へ吸収されていく。「見えるものは、見えるものよりもっと見えるもののなかで消える—猥褻」(『宿命の戦略』11)。この1980年代前半のヴィジョンは、『透きとおった悪』でも継承され、これから見るとおり、1990年代の文脈で更新されていく。

いまや現実のリアリティは、現実の非現実化によって消えるのではなく、現実よりリアルな現実の過剰、つまり現実のハイパーリアル化によって消える。現実の非現実化とは、存在と不在の二値性を前提として、存在から不在へ物の実体性を消滅させることにすぎない。他方、現実のハイパーリアル化とは、存在と不在の二値性の間で、多値性のグラデーションとして記号を拡散させることである。ボードリヤールは『透きとおった悪』で、前者を「運命」、後者を「フラクタル」と区分して、『宿命の戦略』で見た消費社会の進化のモードを繰り返す。「消滅という宿命的なモードより、むしろ拡散というフラクタルなモードへ」(12)。

フラクタルの世界は、それと連動して「経済学の終焉」(41)をもたらす。特にブランド品への欲望に見られるように、物の価値が使用価値と交換価値の彼岸へ消えていけば、経済学は価値自体を学問の対象にできなくなる。「それぞれの粒子が独自の軌跡をたどるように、どの価値も、あるいは価値の断片も、シミュレーションの天空で一瞬輝き、他の価値の軌跡とはほぼ交わらないジグザグ線を描いて、虚空へ消えていく」(14)。それと同時に、「価値法則、市場法則、生産、剰余価値という資本の古典的論理」(42)で成立していた経済学も、「我々の目の前で終わる」(ibid.)。あとに残るのは、「浮遊する、恣意的な規則をもつ純粋なゲーム」(ibid.)として経済を超えていく経済、つまり「投機のトランスエコノミー」(ibid.)という価値の砂漠である。

ボードリヤールによれば、この種の変化は、美術や経済ばかりでなく、政治や性の分野でも起こっている。政治も性もハイパーリアル化されて、「トランスポリテック」と「トランスセクシュル」(18)の次元へ入ったというわけである。そのとき、政治は「スペクタクル」へ、セックスは「広告とポルノ」へ転移し、記号のモデルとしての政治や性は、そこから派生した記号の乱舞のなかへ消えてしまう(17)。「すべてが政治的になれば、もはや政治的なものはなくなり、『政治的』という言葉も無意味になる。すべてが性的になれば、もはや性的なものとはなくなり、性はあらゆる制限を失う」(ibid.)。

その結果、政治は、他分野(経済、科学、芸術、教育、メディア、スポーツなど)と「ジャンルの混同」(16)を起こし、政治そのものとしてではなく、政治ショーとして社会へ浸透し

ていく。そして性も、たとえばチチャリーナ、マドンナ、マイケル・ジャクソンという「ミュータント [突然変異]」や「ジェンダーベンダー [性歪曲者]」を介して、SF風の人工美、両性具有のアンドロイド、異種交配のアンドロギュノスのなかへ消える (29)。さらにクローンの発明もまた、「個人の偶然の魅力をつくっていた差異をめぐる出来事」と共に「セックスによる生殖」を不要のものとしながら、性自体を超える (125)。

こうして、美術、経済、政治、性は、ハイパーリアルの世界へ記号のモデルを提供したにも関わらず、そこから葬り去られるべき厄介物として、つまり「呪われたもの」(110) として追放される。現実よりリアルである記号の帝国では、オリジナルとしての物自体はもとより、オリジナルとコピーの差異も、コピーとコピーの差異も、存在してはならないからである。そこで求められているのは、記号で透明になった現実を純粋培養することにはかならない。ボードリヤールの思考は、ここから新しい論点へシフトしていく。それは他者の問題であり、悪の問題である。

その要点は、ハイパーリアルの自己増殖が、他者の排除を伴っているところにある。「透明になった現実を純粋培養すること」も、その観点から見れば、記号のクローン化、つまり自己の反復による自己拡散といえる。これは徹底した自己肯定の夢である反面、無菌状態の「過成長」を夢見る自己につきまとうリスクも暗示している。「絶え間なく続く肯定性の生産は、恐ろしい結果をもたらす」(ibid.)。ボードリヤールは、それを他者の不在による自己の病理として説明する。

第一に、自己 (ハイパーリアルの世界) から非自己 (現実の世界) として排除されたものは、自己に報復する。「自己の呪われた部分を削除するものはすべて、自らの死に署名することになる。これが呪われたものの定理である」(ibid.)。自己を肯定しようとするれば、非自己は否定され、「呪われたもの」として蘇り、やがて自己全体を死に至らしめる。

第二に、自己のクローン化の問題がある。「同一者によって生きる者は、同一者によって滅びるだろう」(ibid.)。自己の純化が進んでいけば、他者を否定して自己を肯定するという自他の関係性も失われ、もはや自己を純化できなくなってしまう。つまり、クローン化した自己は「自己でも他者でもなく、同一者にすぎなくなる」(ibid.)。それゆえ、他者との対立を拒否して、自己の反復だけで増殖しようとする自己は、「他者の地獄」を逃れても「同一者の地獄」(128) へ落ちる。

「それでは、他者性はどこへ行ってしまったのだろうか」(129) とボードリヤールは問う。自他の差異がなければ、自己の純化としてのハイパーリアルの世界は進展しなくなる。しかし自他の差異をなくさなければ、他者が不純物として残り、やはり同じ結果を招く。問題は、このジレンマに介在する他者性の意味にある。というのも、自己に否定された非自己には、まだ「取り引き可能な他者性」(138) が残されているからである。他方、真の他者とは、そもそも何とも交換できない他者性を有したものといえる。「取り引き」は両者の差異によって可能になるが、「他者性は差異ではない」(131) からである。

ボードリヤールが考えているのは、自己の対立項としての他者ではなく、自己の外にありながら、自己に忍びこんでくる「大文字の他者」(ibid.) であり、その「ラディカルな他者性」

(133)である。それは、「他者性の不在は、とらえがたい別の他者性、ウイルスという絶対的な他者性を分泌する」(72)という表現からも見て取れる。ここには、二種類の他者性が想定されている。一つは「自己―非自己」の関係における他者性、つまり、自己によって排除された非自己の他者性であり、もう一つは「ウイルス」の他者性、つまり、非自己が他者に変身して帯びた他者性である。前者は、自己との差異によって生まれた他者性であり、小文字の他者性といえる。他方、後者は、自己との差異を超えて生まれた他者性であり、それゆえ大文字の他者性、「ラディカルな他者性」である。

ボードリヤールは、白人によって植民支配された先住民を例にして、「ラディカルな他者性」を説明する。たとえ先住民が白人に剥奪されたものを奪い返しても、それは植民支配の現実を追認するという点で、「白人の勝利を意味」(ibid.)しても、決して「復讐」(142)にならない。それより、白人がわけもなく、先住民の文化に戸惑いを覚えたり、先住民の先祖時代のゆっくりした速度に惹かれたりして、「『夢の時代』の支配」(ibid.)に屈するとき、先住民は白人に対して巧妙に「復讐」している。これこそ「ラディカルな他者性の運命」(143)である。

ボードリヤールにとって、「ラディカルな他者性」は、それゆえ、自己を浸食する他者の暴力性として「悪」(144)を意味している。但し、それは善と対立した悪ではなく、先住民の例で見たとおり、善(白人)から排除された非善(先住民)が「ウイルス」(16)に変異して、善に感染する悪である。善と対立した悪であれば、善と真正面から闘うことになるだろう。しかしウイルス化した悪は、自己に否定された非自己が、他者に変身して自己へ回帰し、免疫不全を起こさせるという迂回路を取る。「否定された他者性の亡霊は、すべて自己破壊のプロセスとして復活する。これも透きとおった悪である」(127)。

現代の悪は、善との対立を超えて、自己(善)が形成されるところならどこにでも、非自己(非善)の変異体、つまり他者(ウイルス化した悪)として、それも「透きとおった他者」(128)('透きとおった悪')として偏在する。それゆえ、主体としての自己にとって、非自己は客体であっても、他者は主体と客体の関係そのものを免れている。「我々はもはや悪を語ることができない」(92)とは、そういうことである。悪はいまや、「ウイルス的でテロリスト的なあらゆる形態に変化して、我々につきまとう」(88)。ボードリヤールは、アヤトラ・ホメイニ(イラン・イスラム共和国の初代最高指導者)を例にして、これを説明する。

ホメイニは、「進歩、合理性、政治モラル、民主主義」を西欧の善として否定することによって、「悪の原理」を武器として手に入れた(89)。その戦略は、西欧世界に対して意外な「優越性」(ibid.)をもつことになる。西欧はそれ以降、善だけを肯定して、悪を口に出せなくなるからである。「西欧では、悪について語る可能性はもはやまったく残されていないし、ほんの少しの否定性でさえ、潜在的な合意によって窒息させられてしまう」(ibid.)。暗黙の了解で、悪を追放する合意が無菌のスクリーンになれば、悪は見えにくくなる。しかし、悪がウイルスの透明性を活かして善へ侵入するのは、まさにそのときである。「それは合意という新しい人工樂園であり、これこそ、死の真の原理になる」(112)。西欧に悪を語らせないようにして、自己を善で純化する夢を見させながら、悪への恐怖で窒息死させること。そこに「新しい人工樂園」に隠された「死の真の原理」、つまり、他者としての悪が開く「同一者の地獄」がある。

「他者」と「悪」は、こうしてリンクしながら、ボードリヤールの思想のキーワードになる。

『不可能な交換』

『透きとおった悪』で見たとおり、1990年代を迎えた西欧世界では、善と悪の弁証法によって進歩を展開するという発想はできなくなった。その結果、善から排除された非善は、悪のウイルスになって善を脅かしながら、善との対立関係から退く。それ以降、善と悪にはどんな交換も不可能になる。『透きとおった悪』から九年を経て、1999年に出版された『不可能な交換』は、その地点から始まる。「すべては不可能な交換から出発する。世界が不確定になったのは、世界のどこにも等価物が存在しないからであり、世界が何とも交換されえないからである」(11)。

原理から見れば、存在しなくなったのは、等価物というより、実体として認識されてきた物自体であり、交換を可能にしてきた物と物の差異である。逆にいえば、実体として物を理解し、物と物の差異を利用して世界に価値を与えることこそ、科学の発達に見られるように、近代以降の西欧にとって「進歩＝善」を実現する方法だった。しかし1990年代末の世界では、実体としての物も、物と物の差異も消えて、交換そのものが不可能になってしまう。その経緯を知るには、ボードリヤールが同書で言及した「人間主義的原理主義」を見ておく必要がある。そこには、交換の可能性の根拠が示されているからである。

「いたるところで、我々は非人間的なものの除去へ向かっている。すべてを人間的なものの審級に従わせる人間主義的原理主義へ。動物、自然、その他あらゆる種類の存在を、人権、道徳的人間学、普遍のエコロジーの名のもとに、すべて人間化する企て。非人間的なものを人間的という唯一の思想に併合する操作の最前線である。」(26)

西欧は「人間的なもの」を自己、「非人間的なもの」を非自己として区分し、非自己を自己に従属させようとしてきた。それが「人間主義的原理主義」の実践である。これには二つの問題が伴うと考えられる。

第一に、西欧は「非人間的なもの」を人間の支配下に置くことによって、「本来の人間的なものに関する、あらゆる思想を奪われてしまう」(ibid.)。その思想とは、「人間的なもの」にうまく回収できないものすべて、つまり「動物、自然、その他あらゆる種類の存在」に開かれた思想である。これなくして、西欧は自己充足した思想の外部へ抜けられなくなる。

第二に、自己に屈服させられた非自己としての「非人間的なもの」は、自己としての「人間的なもの」へ報復する。それは、西欧にとって、善から排除された非善が、悪のウイルスになって善へ侵入する働きと重なる。ウイルスが、生物の細胞を利用して自己を複製し、大量のコピーをつくって細胞を破壊し、飛び出したウイルス粒子によって、また別の細胞で連鎖反応を引き起こしていく非生物(細胞をもたないという意味)であることを想起しよう。西欧が「非人間的なもの」を「人間化」したことで、「本来の人間的なものに関する、あらゆる思想を奪われてしまう」というのは、その点で、すでに、ウイルス化した悪による善への報復になっ

ている。

西欧は、それに関わらず、「善による世界の均質化と、想像の博物館への悪の追放」(117)を夢見て、自己を善として純化しようとする。しかし、その欲望ゆえに、西欧の悪に対する支配は失敗する。善は世界を統合しようとして、あえて悪との二項対立を前提とし、悪を否定すべき分身と見て、「自己—非自己」の関係を「主—従」の関係へ読み替える。他方、悪はウイルス化した非自己、つまり他者として善の主従関係をすり抜け、二項対立を介した交換を不可能にする。それは、善と悪の対立が善による「錯覚」(122)だからであり、「悪は浸透しても浸透されない」(120)からである。

これまで見てきたとおり、西欧は「人間的なもの」を「自己＝善」とし、「非人間的なもの」を「非自己＝悪」として世界を構築してきた。それを支えていたのは、「人間主義的原理主義」に隠された二項対立であり、対立項の差異を介した交換である。ボードリヤールは、その背後に「善の主唱者」(22)として、つまり交換の可能性の根拠として「神」(ibid.)の存在を見る。それゆえ西欧は、神の善に保証されているかぎり、悪を「単なる偶発事」(23)として、自らの世界観を変革する必要もなかった。しかし、それらはすべて「神の死」(ibid.)によって崩れてしまう。というより、西欧にとって、二項対立を前提とした世界観が崩れることこそ「神の死」だった。それは、悪が善を倒したからではなく（そもそも「善と悪は対立していない」(117)）、人間が神の庇護のもとに善で悪を倒そうとして、悪をウイルス化させたからである。それでは、「神の死」に直面した西欧はどうしたのだろうか。ボードリヤールは、それに二つの解釈を用意する。

第一に、神の王国を人工的に再創造すること。「神の王国の等価物、つまり完全に肯定的な世界の内在性を技術的に実現すること」(23)。しかしこれは、自己を善として純化しようとする点で「人間主義的原理主義」への逆戻りであり、人間が神になり代わるという点で「神学的視点から見ればまったく異端」(ibid.)である。

第二に、「世界を破壊して、人工の世界に置換すること」(ibid.)。神が死んで、世界だけが残された状況では、その世界を贈与してくれた神に返礼しようとしても、相手は存在しない。世界と交換に何も返せないのに、その世界を受け取ることはできない。それなら世界を清算して、人工の世界に置き換えよう。しかしこれは、最初の案よりさらに人間の所行への「代償」(24)を伴う。人間王国を創造した罪は、その王国を破壊することでしか清算できなくなる。

近代までは、神が世界の等価物として善を提供し、世界はそれと交換されて独自の価値を帯びてきた。しかし「神の死」によって、人間は神の視点から、世界へ等価物を提供する役割を演じざるをえなくなる。西欧にとって、これをクリアする最善策は、神不在の世界に差異を生み出し、交換を復活させて、世界に価値を与えることだった。西欧は、その具体案として、生産＝消費のモードを更新する方法を選んで、それを「神の死」を乗り越えるためのサバイバル戦略にしたと考えられる。物から商品へ、商品から記号へ生産のモードを更新することで、差異を発生させる限界はなくなり、交換はいつまでも続くと思われたからである。たとえば、物と物を介した象徴の交換から、商品と貨幣を介した価値の交換を経て、さらには現実と記号を介したリアリティの交換へ。

しかし1990年代の10年間で、マルチメディア、コンピューター、サイバネティックス、クローンなどを介したシミュレーション操作がさらに発達して、状況は大きく変化していく。記号は「ヴァーチャルリアリティ」(24)をDNAとして急速に進化し、テレビゲームからライフスタイルに至るまで、日常の細部へ浸透する。他方、現実のシミュレーション操作は「高性能」になり、記号のように「投機性」を帯びることはあっても、それ自体、「何も意味しなくなってしまう」(13)。それゆえ記号は、自らを生んだテクノロジーからも現実の準拠枠を与えられず、「世界不在のなかでの世界の自動記述、完全な等価物、完全なスクリーン」へ転移する(25)。それと同時に、現実と記号の区分も、それを介した両者の交換も不可能になる。「現実とはもはや記号の効力をもたず、記号はもはや現実の効力をもたなくなる」(14)。「現実の領域自体が、もはや記号の領域と交換できなくなっている」(13)。その結果、世界は、交換によって生まれる価値を得られなくなる。

「死、幻想、不在、否定性、悪、呪われた部分が、あらゆる交換の透かし模様として、いたるところに存在している。交換の大いなる賭の可能性を成立させているのは、この無の連続性である」(ibid.)

世界に価値をもたらす交換が不可能になったとき、世界は無価値になると同時に、無＝価値の構造を明らかにする。つまり、「価値」を保証していたのは、表舞台の交換というより、そこから排除されながらも、それを裏舞台として支えていた「無」である。表舞台は「生、現実、存在、肯定、善、真理」を交換の等価物として「有」の世界をつくり、裏舞台は「死、幻想、不在、否定性、悪、呪われた部分」を交換の「透かし模様」として「無」の世界をつくる。それゆえ表舞台の存在は、宇宙の存在のように、裏舞台を「暗黒物質」(21)として成立している。ボードリヤールが考えているのは、こういうことだろう。

しかし表舞台の交換が不可能になったいま、世界は裏舞台の「無」に侵入されて、マネーゲームとしての「狂った投機」(16)に見るように、価値の錯乱に投げこまれてしまう。ボードリヤールは、その状況を「価値自体のニヒリズム」、「現代のニヒリズム」と規定する(15)。それは、「不確実性」を「ゲームの規則」にして、これまでの人間の現実感覚を麻痺させるほど、世界のありようを変質させる(17)。たとえば、ハイパーリアルな記号は「人工の等価物」(57)として現実そのものを不要にする。クローンは「種の繁殖」(ibid.)を可能にしてセックスを不要にし、情報はデジタル信号となって言語を不要にする。テクノロジーによる生産は肉体労働を不要にし、コンピューターは人間存在の延長として脳を不要にする。そのとき人間は、現実、性、言語、肉体、脳といったルートを経ることなく、「経済と情報と人工知能の全体主義的システム」によって「究極の自由」を手に入れる(153)。ボードリヤールは、これを「状況の詩的転移」と呼んで、「この世界の全体化をむしろ喜ぶ必要がある」と説く(ibid.)。

しかし、ここにも論点は残されている。それは、『宿命の戦略』と『透きとおった悪』でもテーマになった他者の問題である。グローバル・ネットワーキングで「世界の全体化」が加速して、すべてのコミュニケーションが双方向性の端末で処理されるようになれば、他者もまた

「不要な機能」(ibid.)になりうる。そのとき、「消滅した他者はどうなるのだろう」とボードリヤールは問う。マルクスが労働力を商品として抽象された人間に「疎外」を見たように、ボードリヤールは現代の他者に「残滓となった人間」(58)を見る。それゆえ他者もまた、現実、性、言語、肉体、脳などと同様、記号のモデルとして無効になりながら、形態を変えてハイパーリアルの世界へ報復し始める。「期限切れの他者性は、憎悪、人種差別、殺人的な実験として復活する」(61)。

その意味で、他者はゾンビのように生きている。ボードリヤールは、ルーク・ラインハートの『ダイスマン (サイコロ男)』(1971年)を例にして、それを傍証する。人生をすべてサイコロに賭けることにした男にとって、サイコロは「どこかに他者性が存在していることの記号」である(80)。つまり、「いずれにしても他者は生成する。どの瞬間にも線引きをするのは他者である」(83)。しかしボードリヤールは、この結論さえ逆説で屈折させる。たとえサイコロを振るのがダイスマンであっても、「偶然に身を任せるという決定自体は、偶然になされていない」(80)。サイコロによって担保されていた偶然の他者性は、この一文で抜け殻になり、実体としてではなく、他者性という「イデオロギー」(60)として生きながらえることになる。

ボードリヤールにとって、これをもっとも顕著にあらわしているのは、『宿命の戦略』と『不可能な交換』でも触れた「出来事」である。「トランスヒストリー [超歴史]、トランスポリティック [超政治] の段階に入ると、出来事はリアルタイムで生産され、配信されるので、もはや本当には起こらず、情報の空虚のなかへ消えていく」(168)。つまり、出来事は何にも還元できないにも関わらず、情報のコードに変換されて、そのインパクトを失う。出来事にはもはや、イデオロギーとして生き残る可能性さえ見えてこない。いやむしろ、20世紀末の世界では、出来事はメディアによって完全に記号化され、すでにイデオロギーとしての効果を失っていたというべきかもしれない。文明社会の人間が、出来事を情報の「透かし模様」としか見ていなかったことを知るのは、『不可能な交換』の出版から二年後、2001年9月11日のアメリカ同時多発テロによってである。それはまた、悪が善の「暗黒物質」として、21世紀の表舞台へ侵入してくることを告げる出来事になった。

『悪の知性』

『悪の知性』は、対談集とエッセイ集を除けば、ボードリヤールの生前に刊行された最後の理論書である。そこには、『物の体系』から『不可能な交換』へ至る思想の流れを踏まえながら、物から商品へ、商品から記号へ、さらには記号の過剰へ発展した高度消費社会の行く末を見届けようとする著者の鋭意が認められる。第一の論点は、『不可能な交換』で問題になった「神の死」のその後である。ボードリヤールは『悪の知性』でも、このテーマを反復して、それを21世紀の視点から練り直しながら、西欧文明の進化を新しいキーワードでとらえる。

「神の消滅によって、我々は現実と直面させられ、この現実の世界を変革する理想的な視点に立たされた。そして我々は、この世界を現実化して、世界を技術的に、インテグラルにリアルにする企てに立ち向かうことになった。」(11) (下線筆者)

神の善を等価物としてきた世界が消滅して、世界の変革は人間の手に委ねられた。但し、世界は実際に崩壊したわけではなく、現実が存在し続けている。「死んだのは、その原則である」(12)。しかし、死んだはずのものを蘇らせるのは、西欧にとって自己矛盾だった。「過去数世紀にわたってつくり出された現実、我々の原則となった現実、いまや消滅しつつある。準拠枠として、あるいは精神的価値として、これをなんとしても復活させようと望むことは反語的誤謬である」(11)。それでも西欧は、『不可能な交換』で見たとおり、生産＝消費のモードを更新して、そこから差異の連鎖を生み出し、世界に現実の原則となる価値を与えようとした。ボードリヤールは『悪の知性』で、それを「世界を現実化する企て」と表現し、そのもっとも進化した形態を「インテグラル」と呼ぶに至る。

「私が『インテグラルな現実』と呼ぶのは、限界のない操作的なプロジェクトを世界で遂行することである。すべてがリアルで、可視的で、透明になる世界、すべてが『解放』され、すべてが実現されて、意味をもつ世界である。(但し、すべてが意味をもつとは限らないのが、意味の特性である。)」(ibid.)

「インテグラル」とは、最先端のシミュレーション操作で、どんな準拠枠に従うこともなく拡張を続けるハイパーリアルの蟹気楼、「現実」という言葉さえ不要になった「現実性の至高の段階」(40)、0と1の二進法によって膨張する「デジタル性の全宇宙」(59)である。21世紀を迎えた西欧は、この「インテグラル」の段階へ達し、それに伴って、第二の論点へ繋がる問題を提起する。それは、現実の消滅による記号の消滅である。

西欧は世界の等価物を発明しようとして、記号の生産から記号の過剰へシフトしながら、現実の消滅の段階を経て記号の消滅の段階へ入ったことになる。塚原史の表現を借りれば、「記号の覇権によって消滅したはずの『現実』が『現実であることをやめてしまった』段階では、現実の記号自体が記号性を失ってしまう」²⁾。換言すれば、記号の世界は、記号によって消滅させられた現実の蒸発と共に消える。しかし逆に、記号の世界が記号性を失わなければ、「インテグラル」の世界の出現は保証されない。それゆえ、『インテグラルな現実』は、現実の殺戮と現実に関するあらゆる想像力の喪失を通過する」(12)と同時に、「インテグラルな現実への道は、記号の殺戮によって開かれる」(57)。

近代の西欧は、「神の死」と共に、二項対立を前提とした世界を奪われた。しかし現代の西欧は、人間の技術革新によって、対立項の相殺を前提とした世界をつくることに成功した。現実の消滅と記号の消滅の果てに広がる「インテグラル」の世界。それは、善と悪の統合を否定された西欧にとって、善と悪の彼岸に浮かんだ現代のユートピアと同義だった。「善と悪の両義性を解消し、その両義性の影を飛び越えて、絶対的肯定性のなかへ入っていくというこの意図は、ユートピアである」(43)。そこでは、「コンピューターによる『作曲』」(21)、「数値処理されたデジタル映像」(22)、「遺伝子操作」(ibid.)のように、音のノイズや画像のブレも編集され、偶然による逸脱や予想される異常も修正されて、完璧と思える世界が実現される。しかし、その世界はまた、「絶対的肯定性」へ向かう特性をもっていたため、第三の論点を開く

ことになった。それこそ「悪の知性」である。

「インテグラル」の世界は、「あまりにもリアルで、ハイパーリアルで、操作的で、プログラムされているため、もはや真実である必要がなく」、「何もそれに対立するものがないという意味で真実、絶対的真実である」(27)。しかし、それは同時に、「否定的なものを欠いた肯定的なものの不条理」、「虚偽を欠いた全体的真実の不条理」、そして「悪を欠いた絶対的善の不条理」を宿している (ibid.)。それゆえ、その世界では「矛盾した二重の運動」(15) が起こっている、とボードリヤールは考える。第一は、世界全体をインテグラル化しようとする運動、第二は、それを逆流させる「脱インテグラル化」(ibid.) の運動である。前者は「世界の全体化への不可逆の運動」として「インテグラルの衝動」、後者は「リアルなものの不可逆性の運動に内在する可逆性」として「決闘の衝動」と呼ばれる (ibid.)。

ボードリヤールは、この区分を踏まえて、世界をハイパーリアルに染める作用を「善の知性」(29)、それを「拒絶」(27)、「転倒」(28)、「否認」(40)、「逆転移」(26, 40) する反作用を「悪の知性」(29) と規定し、さらに「悪とは、現在と過去のありのままの世界である」(121) と主張する。つまり、究極の善としての「インテグラル」の世界により、その影として追放された「ありのままの世界」こそ、現代の悪にはかならない³⁾。それゆえ「悪の知性」とは、「ありのままの世界」の奸計であり、世界を理想に向けて改善し、技術で進歩させようとする人間の夢、つまり「インテグラル」の世界への不可逆性を取り消そうとする可逆反応のことである。

近代以降、「ありのままの世界」は「非—真理、非—客観、非—合理」(39) として存在し、それゆえ不在の存在と見なされてきた。しかし西欧は、この仮説の「非」に含まれる「悪の知性」の魅力に抗うように、それを別の仮説で置き換えていく。「非—真理」を「真理」で、「非—客観」を「客観」で、「非—合理」を「合理」で。そうして西欧は、「真理、客観、合理」への信仰によって、世界の不条理に「現実性」(40) を与えようとした。「不確実さと根底的な幻想に直面する絶望から、人々はもっとも安易な解決策を立案した。現実性である」(ibid.)。「もっとも安易な解決策」—ここに第四の論点がある。

ボードリヤールによれば、その種の解決策で現代の世界にもっとも広がっているのは、善を幸福に、悪を不幸に置き換えることである。その意味で、「インテグラル」の世界を可能にした技術革新は、「幸福＝善」を最大化しようとする人間にとって、最強の解決策を提供したといえる。なぜなら、それは幸福さえをもハイパーリアル化して、「インテグラルの幸福」(41) をつくり出し、ひいては人間自体を「インテグラルのわたし」に変えたからである。1980年代後半から今日にかけて、日本で『自分』探し＝『幸福』探しに奔走する人間が増えていることは、「悪の知性」が身近にも蔓延していることを示している。「いたるところに、我々各人のなかに、至福に与えることに抵抗する『悪の知性』は、いまだに存在する」(ibid.)。

ここから、物議を醸したボードリヤールのメッセージと共に、『悪の知性』の最後の論点が見えてくる。それは、『宿命の戦略』、『透きとおった悪』、『不可能な交換』にも流れていた「出来事」のテーマである。「我々に必要なのは悪の知性であり、世界秩序の内部に起こる痙攣である。テロリズムは、この痙攣を出来事にする瞬間であると同時に、その残像である」(139)。「インテグラル」の世界では、人間は「普遍的欲望の達成」(14) を願うあまり、「運命の偶発

や達成されない欲望」(ibid.)をありえないものとして押し殺しながら、その逆説として、自らの秩序を内から崩壊させる「出来事」を待ち望む欲望を募らせつつある。「我々の内には、出来事への途方もない欲望が存在している」(113)。

21世紀の現代人が「真理、客観、合理」をハイパーリアル化して世界を進化させ、「インテグラルの幸福」で自己を肥大させようとするとき、そこで夢見られているのは、人間による善の世界の生成と、その世界への人間の没入がブレンドした「同一者」のエクスタシーである。「正当化はすべて、まさに出来事への、事物のあらゆる秩序の転覆への曖昧な欲望を覆い隠すだけである」(114)。たしかに、出来事としてのテロへの欲望は、秩序への欲望にとって、「悪の侵入と秘密の規則の復活への、まったく冒瀆的な欲望」(ibid.)だろう。しかし、その「悪の侵入」は、世界の存在を「真理、客観、合理」に還元し、「幸福」の色で染める人間の善の純化と逆向きに釣り合っている。それゆえ、善のエネルギーの発生と同時に、それを逆流させる悪のエネルギーは、「まったく正当化できない出来事のかたちを取って(自然災害のように)、善と悪の力のバランスを回復させる」(ibid.)。人間はそれに抗議して、善意の声をあげるだろう。しかし、その声はそのとき、「ハイパーリアル化した善の世界をむしろ『透かし模様』として『ありのままの世界』を見よう」と囁く悪意の声に誘発されている。「我々のあらゆる道徳的抗議は、悪の自動的可逆性が我々に及ぼす背徳的な魅惑に見合っている」(114)。

ボードリヤールの脱構築の視点から見れば、2001年9月11日のテロと2011年3月11日の地震、津波、原発事故を見る私たちの眼も、出来事の出現を欲望させる悪意に誘発されていた。それを伝えるボードリヤールの声は、その意味で、善意を帯びている。しかし、それを現代人への「告発」や「啓蒙」として受けとめるとき、私たちの思想は「もっとも安易な解決策」へ墮し、ボードリヤールの思想は「悪の知性」としても、「出来事」としても、光を失うことになる。

注

- 1) ボードリヤールの翻訳は、原典から新たに訳した。
- 2) 『悪の知性』、p. 266
- 3) 「ありのままの世界」は、それ自体、シミュレーション操作で抜け殻になった「身体、セックス、生殖、言語、死」などを「無用の機能」として抱えながら、「インテグラル」の世界とリンクした「パラレルの宇宙」を形成している(『悪の知性』、169)。

参考文献、引用文献

- 佐伯啓思『経済学の犯罪』(講談社、2012年)
榎木野衣『増補 シミュレーションニズム』(筑摩書房、2001年)
ジャン・ボードリヤール『悪の知性』(NTT出版、2008年)
_____『宿命の戦略』(法政大学出版局、1990年)
_____『透きとおった悪』(紀伊國屋書店、1991年)
_____『パスワード』(NTT出版、2003年)
_____『不可能な交換』(紀伊國屋書店、2002年)
塚原史『ボードリヤール再入門』(御茶の水書房、2008年)
_____『ボードリヤールという生き方』(NTT出版、2005年)

- Baudrillard, Jean. *La Société de Consommation*. Paris: Denoel, 1970.
- _____. *La Transparence du Mal*. Paris: Galilée, 1990.
- _____. *L'Echange Impossible*. Paris: Galilée, 1999.
- _____. *Le Pacte de Lucidité ou L'intelligence du Mal*. Paris: Galilée, 2004.
- _____. *Les Stratégies Fatales*. Paris: Grasset & Fasquelle, 1983.
- _____. *Le Système des Objets*. Paris: Gallimard, 1968.
- _____. *Mots de Passe*. Paris: Pauvert, 2000.
- Smith, Richard G. Ed. *The Baudrillard Dictionary*. Edinburgh: Edinburgh UP Ltd, 2010.
- Walters, James. *Baudrillard and Theology*. London: T & T Clark, 2012.

(原稿受理日 2013年9月27日)